

# 社会福祉の歴史を学ぶこと

——『社会福祉発達史キーワード』を刊行して

金子光一

## はじめに

二〇〇五年に『社会福祉のあゆみ——社会福祉思想の軌跡』をアルマシリーズで刊行して頂き、今年（二〇〇九年）五月末に、『社会福祉発達史キーワード』を、古川孝順氏と編著で上梓させて頂いた。私が有斐閣の「キーワード」シリーズに関わらせて頂くのは二度目で、最初は平岡公一氏・平野隆之氏・副田あけみ氏が編集された『社会福祉キーワード』だった。同書の初版は一九九九年で、今からちょうど一〇年前であるが、光栄にも第1章

「制度・歴史」の全八項目と第2章「基礎概念」の二項目を担当させて頂き、執筆を通じて多くのことを学ばせて頂いた。

有斐閣のキーワードシリーズは、一〇〇のキーワードを選び、そのキーワードについて見開き二頁で解説するというスタイルをとっており、興味のもてそうなキーワードから読み始めることが可能で、とても便利で使い易い本である。とくに、今回の『社会福祉発達史キーワード』は、日本の社会福祉の歴史に焦点を当て、重要事項を抽出して時系列に整理しており、また、各

項目とも「社会的背景（歴史的位置づけ）」「展開（内容）」「意義（その後の影響）」という柱を立て、史料を紹介しながら解説を行っているところが特長である。本書の執筆には編者を除いて二名の研究者のご協力を得ており、前述の『社会福祉キーワード』が編者を除いて四名であったことを思うと、多人数による大規模な作業であった。そのため調整の難しさはあったが、分担執筆者の一人ひとり専門の領域から丁寧に解説しており、内容に深みと厚みをもたせることができたと思負している。

## 1 日本の社会福祉の歴史教育の現状

私が『社会福祉のあゆみ——社会福祉思想の軌跡』や『社会福祉発達史キーワード』などの教材（テキスト）の刊行にこだわる理由として、社会福祉の教育現場における「歴史」軽視の傾向に対する反発がある。

今日、社会福祉領域における歴史教育の不振は深刻であり、多くの福祉系大学・短期大学・専門学校で教育課程（カリキュラム）表から歴史関連科目が消されている。

その要因として近年の社会のニーズの高度化・多様化をあげることができるとくに日本では少子高齢化傾向のほか、子育て不安、児童や高齢者の虐待、痴呆や寝たきり老人の増加などが社会問題化し、また単身生活者世帯の増加や障害者の生活困難など多様な社

会的支援を必要とするニーズも生じており、それら流動的な現状の動きに敏感に対応し、目の前の課題を速やかに解決する知識や技術が求められている。換言すれば、これだけ逼迫した直近の課題を抱えている社会福祉の領域で、悠長に歴史などをやっている暇はないというのが大勢の意見である。

また、社会福祉士養成課程における「歴史」の位置づけも、今日の歴史教育不振の要因を形成してきたと考えられる。二〇〇七年二月に「社会福祉士及び介護福祉士法」は改正されたが、新しい社会福祉士養成教育課程においても「歴史」は軽視されている印象を受ける。これまでの国家試験で歴史に関する問題が毎年出題されていた「社会福祉原論」も科目名称が「現代社会と福祉」に改められた（単に「社会」ではなく「現代社会」、「社会福祉」ではなく「福祉」というところが

ミソ？である）。財団法人社会福祉振興・試験センターが示している「現代社会と福祉」の出題基準の八つの大項目の一つに「福祉制度の発達過程」があげられたことは個人的に評価したが、社会福祉の歴史は制度の発達過程を学ぶだけで十分とは決していない。とくに社会福祉の歴史研究の独自性は、社会的側面と生活的側面を「歴史性」において総合的に追究する点にあると考えられる。社会や周囲の環境によって踏みにじられ続け人々の歴史や政府の方針に反する思想の歴史に着目することが、「社会福祉のあゆみ」を語る場合に重要である。どの国におけるいつの時代も社会の発展過程には光と影がある。光の部分だけを追い求めて歴史を綴るのではなく、影の部分の歴史を検証し、さらに一層明らかにすることが、社会福祉の実践においても政策形成においても必要であろう。

新しい社会福祉士養成教育課程をみると、ソーシャルワーカーの養成において必要なのは、光の当たった一部分で、価値の問題を含む社会福祉の本質にかかわる歴史は必要ないと言わなければかりである。本当に「社会福祉の歴史」は必要ないのであるか？

## 2 イギリスのソーシャルワーカー養成教育

ソーシャルワーク教育を早い時期から行ってきたイギリスはどうであろうか？ ソーシャルワークの源流であるCOS(慈善組織協会)やセツルメントの活動がイギリスで行われたのは、一九世紀後半である。ロンドンCOSやトインビーホールは、早い時期からワーカーやセツラーの養成教育を積極的に進めていた。とくにロンドンCOSは、一九〇三年にソーシャルワーカーの訓練機関としてロンドン社会学校

(London School of Sociology, LSS) という専門学校を設立し、専門家養成教育を行っていた。また、ウェッブ夫妻 (Sidney & Beatrice Webb) が設立に関与したロンドン経済学校 (London School of Economics, LSE) は、一九一二年にソーシャルサイエンス・アドミニストレーション学部 (Department of Social Science and Administration) を設立する際、前述のLSSを吸収し、ソーシャルワーカーとソーシャルワーカーを二本柱とする教育体制を確立した。現在のイギリスの大学でソーシャルワークの実践教育を行っているのは、二〇〇八年現在、五五大学である。しかしその中には、一九九二年の教育改革で旧ポリテクニック(高等専門学校)から大学に昇格したものも多い。イギリスでは現在、高等教育機関に対する国庫補助を配分する財政機関で

あるHEFCE (Higher Education Funding Council for England) が大学の研究活動を直接評価し、その結果に基づく財政配分を行っている。また、そのデータに基づく教育水準のリンクをウェブ上でタイムズ誌が Good University Guide 2009 として公開している。それによれば、ソーシャルワーク教育を行っている大学で最も評価が高いのは、ヨーク大学 (University of York) である。研究の質: 5A、入学基準: 三六五、学生調査: 七二%、総得点: 一〇〇である。ヨーク大学は学部名称が「ソーシャルワーカー & ソーシャルワーク」(Department of Social Policy & Social Work) であり、学部内の教育プログラムの中に「ソーシャルサイエンス」「ソーシャルポリシー」「ソーシャルワーク」という三つのコースがある。「ソーシャルサイエンス」や「ソシ

ヤルポリシー」のコースでは、基礎的な学習から応用研究に至るまで歴史はとも重視されている。また「ソーシャルワーク」のコースでも、初年度で開講される「実践のフレームワーク」や「ソーシャルポリシーの基礎」で、

ソーシャルワークの価値やソーシャルポリシーの歴史を重視した教育が行われている。「ソーシャルワーク」のコースの学生は、それらを基礎として実践の専門的学習に入り、二一五日間の実習を行う。

## 3 なぜ歴史を学ぶのか

そもそもなぜ社会福祉において歴史を学ぶ必要があるのか。先学の社会福祉研究者たちが、なぜあれほど「歴史」を重視し、尊重してきたのか。それは社会福祉の学問的特性と不可分であると考えられる。

社会を構成しているのはそこで生活している人間である。その人間には意志があり、それによって社会は動いている。ただ時として特定の人の意志が社会に反映されない場合がある。それ

はしばしば社会的に弱い立場におかれている人々であった。また、市民社会には政治的・経済的・法的・道徳的・文化的にいろいろな束縛がある。束縛された中で人間の生活は規制され、その枠の中で欲求の充足を目指している。すなわち、人間が社会を作るのであるが、それはすべての人の意志によって形成されたものではない。また逆に社会によって人間は作られているのであるが、そこでは欲求が満たされている人とそうでない人がいる。かつて高島善哉氏は、『社会科学入

門——新しい国民の見方考え方』(岩波新書・一九六四)において、人間の社会を大きな川の流れにたとえて、「歴史」「理論」「政策」の重要性を主張したが、私は、社会福祉のニーズをもつ人に適切なサービスを提供するためには、「理論」研究・「政策」研究の前提として、とくに「歴史」研究が重要であると考ええる。

具体的には、いつ、どこで、どのような人が非人道的なあるいは差別的な扱いを受けたのか、どうして彼らの悲痛な叫びにその時代のその社会は耳をかさなかったのか、何がそうさせたのか。そしてそのことが問題であると、いつ、どこで、誰が気づき、それに対応しようとしたか。初期の対応は烙印(ステイグマ)を与えるものであったが、その要因は何であったのか。人権を無視し、生活そのものを踏みしめる行為が行われてきた史実を直視し、そ

れにどのような背景があったかを検証することは、その社会の文化に根ざした思想を解明することに繋がる。そして、そのような偏見や差別の社会を変えるために、あるいは思潮を変えるために行われた活動や運動の積み重ねが、今日の社会福祉の基盤を形成しているのである。

現代社会において必要なことは、目の前の課題に目を奪われるばかりではなく、丹念にその過程を分析し、その問題の本質を探り、真理を見極めることである。今日の社会福祉の領域でもも欠如しているのは、そのことであると私は考える。

#### おわりに

今回、多くの方に「日本の社会福祉発達史」を知ってほしいと思い、『社会福祉発達史キーワード』(日本編)を刊行させて頂いた。しかし日本の社

会福祉の歴史は、トピックスを並べただけでは全体の流れがつかみ難い側面もある。そこでぜひこれに続く『社会福祉発達史キーワード』(欧米編)を刊行したいという願いを秘かに抱いている。欧米の社会福祉の歴史は、社会福祉の流れを理解する上で適切な素材を提供してくれる。また、日本の社会福祉の歴史で、なぜその時期にそのような対応が取られたか、その必然性を理解する上でも、日本と欧米の社会福祉の歴史をセットで学ぶことが重要であると考える。

(かねこ・こういち||東洋大学社会学部教授)

古川孝順・金子光一「編」  
『社会福祉発達史キーワード』有斐閣刊  
四六判、一三五二頁、定価一八九〇円(税込)  
●好評発売中